

フランちゃんはワラキアでも虐  
待されてるんです

雷之電



# 目次

|              |    |
|--------------|----|
| ふたりの家族愛      | 1  |
| 奈落で見た光       | 6  |
| 松葉に宿る愛       | 14 |
| 父に捧ぐ、五世紀の出発点 | 22 |



## ふたりの家族愛

父は吸血鬼を卑下していた。小さいながら立派な城を構えているのに、吸血鬼は暴虐を働くのが生き物としての定めだと言つて、曲がりなりの家制度の跡継ぎたる私に礼儀作法を教え込んだあと、あえてそれを崩して振る舞うよう言いつけていた。いや卑下でなく、人間様とは違う価値観から最高の礼節を意識していたのかも知れない。

「レミリア、君は『しあわせ』かい？もしそうでないとしたら、その原因を精一杯取り除こう。魚の骨みたいなのであればいいが」

威厳ある父、というより感覚はパパだった。

「んん……街の子と遊ばせてほしい」

「そりや象のアバラだな。私も考えたさ。人間はただの餌じゃない……もちろん他人との関わりはどの年をとつても重要なんだ。しかしなレミリア、もし人間と仲良くなつて、人間を殺せなくなつたらどうする？まさに致命的だろう。そうだな、一人で締めから調理、片付けまでできるようなつたら考えようか」

吸血鬼が人間の痛みを知れば灰となる。彼の口癖だ。家畜に同情して血肉を拒めば生きてはいけない。たつたそれだけのことだった。

この会話はもはや暗黙の茶番だった。父に隠れて街の子供らと会つていることはもうばれていよう。しかし敢えて外界との交流を絶とうともしていないようだ。

金で買えるものならなんだつてくれる。しかしその財源はよく知らない。仕事といえば、城のある森に接した街の人を年に何人が失踪の体で貰い、その超常的な人さらいの噂で外部勢力から街を守る、ということをしていられるらしい。たつたこれだけで今の豊かな暮らしを支えられるとは思えない。きつと他にも何かやつていようのさだろうが、「パパ」のイメージが崩れるような気がして聞けないでいた。

……具体的にはオスマン帝国の軍勢だ。随分前から周辺三国にこの地域を奪われたり、奪い返したり、とにかくめっちゃくちゃになつてい。奴らが小さな森の噂話に耳を貸す気がしないが、今の今まで平和を保つてきているということは効果があつたのさだろう。

そうだ、よく父はヴラドという英雄の話をする。何十年前も前、オスマン帝国、ブルガリア合わせて二万もの敵兵で屍の林を作り敵を撤退させたという英雄。英というのはかくも主観的でおつかないものかと、話を聞かされるたび身震いするのだ。

「我々に最も近い、あるいは我々の理想たる人間」と父は謳う。確かにそうかもしれないが二万人分の血などどうやって飲み干せようか。

「食事が終わったら街へ行こう。宝石商、いやただの仲介か、人を呼んであるんだ。フランへのプレゼントをレミリアに選んでもらいたいのか」

「……フランには会えないの」

母が消えてすぐ、フランは父に地下へ閉じ込められていた。詳しいことは何も知らされていないが、きっとこの表現で合っているとと思う。母がいるときから地下へ降りることは禁じられているので、下の様子もわからない。別れの挨拶もなしに、挨拶があるほどのこととも知らず連れられていったあの背中が、私の見たフランの、暫定で最後の姿だった。

Frandle, Frantic doll, これは父が勝手に呼んだ名前だった。文字に起こすことはできたがこれが意味するものはよくわからない。父はこの Stacciju 家をよく Scarlett 家とも呼ぶ。聞くとこれらは遠く西の島の国の言葉だそうだ。

「心配ない、フランは元気でやっているよ。長女には長女の、次女には次女の育て方がある。そうだろう？もう少しの辛抱だ、じきフランはとびつきり美しくなって帰るだろうさ！だろう？いや帰る！帰すとも！足りないのはそう、まばゆさで彼女に劣らぬ宝石だけなんだよ」

何を買うわけでもなく観光として夜市へ来た。森の脅威（間違はなく我々）が君臨する夜だからこそ、家々で散らばらず、こうして市場で集まろうということらしい。人間のすることはよくわからない。自分も「朝遅くまで」起きていると、その日の夜は動いていられなくなる。夜は素直に眠ればいいのに。

街へ出向くときは身分を明かさないために、羽まで隠す変わった服を着る（数百年後になって思ったが日本の Ninja のような格好だった）。こちらを知らない人からは素性がわからず、特異な服は目立つので知る人はすぐにこちらを見つけられる。なかなか便利だ。

「お父さん、あれ」

香辛料を袋に入れて並べる店に目が留まる。離れていても肌で感じるほど強烈な臭気を放つそれらに興味を持たずにはいられなかった。

「ありや食えんぞ。束にして吊つてあるあの赤いのは、一度噛めば三日は激痛にのたうち回り、飲み込めば十年は何も喉を通らなくなるのだらう！試してもいいが私にできるのは水を運ぶことくらいだぞ」

腐りかけの肉をマシな味にするための調味料、あるいは防腐剤らしい。まあいつでも新鮮な血肉を調達できる我が家には必要ないか。よくそんな肉を食べたものだ。

しばらく見て回り、通りに面した建物の一つに入る。空き家かと疑うほどになにもない。ついていった二階にあつたのは、私が手を広げたくらいの広さのテーブルと、三つの椅子だけだった。

「早く着きすぎたな」

しばらく待つと一抱えもある大きな革の鞆、いやケースを抱えた男がやってきた。向かいの椅子にどかと座り早くもケースをこちらに向けて開く。

「よくも一人でここまで来られたものだ、さすがだな」

「ええ、貴方様を始めとするお客様の無理難題を是が非でも叶えるべく、世界中を旅してまいりました。騎兵程度ならやすやすと挽き肉にできますゆえ……さ、どれでもどうぞ」

ケースには無造作に、色とりどりの宝石が詰め込まれていた。どれも拳くらいある。信じられない。今まで見たのはせいぜいそら豆ほどの大きさのものだ。これにかかる金といったら、この土地どころか世界の情勢を揺るがしかねないだろう。

「なに、難しいことは考えなくたっていい。どれが似合うと思うかだ。そうだな、一対で七、八種類」

「え、と……」

どうぞ、お手にとつて。言われて青色のものを取ると、そのなんと軽いことか。まるで乾燥海綿のようだ。

「独自の技術といえましょうか、密度を大幅に下げること成功したのです。もとは大きいとはいえせいぜい『常識的な最大サイズ』程度だったんですがね、やはり無理難題もいずれ解決できるものでして。ああ、強度はその分下がっています。くれぐれも衝撃を与えませぬよう」

「……普段はどんなドレスを着ているの」

「赤一択だ。どの微妙な名前でもない。赤だ」

配色のセンスは今までに発揮したことがないのでよくわからないが、とりあえず色とりどりに選んでみることにした。

「なるほど。アクアマリン、ペリドット、シトリン、コハク、スピネル、アメジスト、サファイアに……アパタイト。承知しました。ではこれらを仰せの通り加工して……直々に持つてまいりましょう」

「帰ったぞ！アヌー！」

アヌは若い男で、父に付き、様々な決断について横槍を入れる、王付きの道化のような役割を担っている。外出時は城で待機していて、門で呼ばば飛んでくる。

「はいただ今！どうされました」

「例に漏れず相談したいことがある。アージエントから届いた手紙だ」

父が懐から便箋を取り出し中の手紙を読み上げ始めた。

「アージエント卿 ご存知の通り我が主の暴虐ぶりといったら目に余るものがあります。急ぎゆえ無礼をお許しください。……はは、とつてつけたような断りだな！なにになに、先日もまとめて三人の使いが、美味いらしい鍋の具となりました。私にはどうすることもできません。物言わぬ道化などこの世界のどこにおりましょう。いたずらな殺生をこれ以上重ねませんよう、主に働きかけていただきたいと……もういい、送り主は……アヌ。アヌ？」

アヌは自分の弔事でも読まれているような心持ちだったろう。ひと呼吸あとには、彼の心臓を父が掴んでいた。

「アヌ、聞いているか？私はお前の裏切りに失望したんじゃない。お前の無能さに呆れているんだ。アージエントの野郎は何だ？私と同じ、吸血鬼。君に同情などしない。彼は、この手紙を読み、そのまま私宛に送り返したんだ。そもそも自ら望んで私に仕えたんじゃないか？」

言い終わる頃にはもう、死んだのか、息をしていなかった。

……もしここで、アージエント卿に代わって私が父に進言したら、使用人への態度を改めるだろうか。この城へ遊びに来るときは彼ら温厚そのものだが、他での行いは何もかも聞き及んでいる。そんな彼に救いを求めたアヌに同情はできないしろ、とにかく、父というか吸血鬼たちの残虐さ、理不尽さはいただけない。

「やつぱり変よ。年に何人も迎えるわけじゃないでしょう」

アヌを食らいもせず、門の横に捨てた後、汚れていない右手を私の肩にぽんと置き笑いかけた。

「はは、そんな考えは教えていないぞ。まあいい、人との関わりは大切だと説いたが、使用人となれば話は変わる。彼らは、そうだな……我々に魂を捧げているようなものだ。牢にいる食料と同じく、家畜同然なんだよ。それに、年に数回この城に献上される人々とは別で、他の地域からも持つてきている」



「もう、資源としてじゃなくて。曲がりなりにも人なのよ」

「ああ勘違いしていた。家畜に同情しての発言なら初めからそう言えばいいんだよ、レミリア……人間が豚に情けをかけることが、一度でもあるか？ 幼子でさえ、夕飯の鍋を楽しみに待っている。それに、食用でも種でも母体でも活躍できない家畜を生かしておく義理はない。わかるかい」

「……つまり、今朝まで仲良くお話してた給仕のおじさんで作る血酒を嗜む時を、今から楽しみに待つのが、私たちの健全さつてわけね」

そうだと。理解の早い子で助かるよ。助からなかったつて愛は不変だがね。そう言つて彼はそそくさと地下へ消えた。

——姉。

「歳が近いから、もし会えるなら……話が合うかも」

——父。

「無償の愛つて言つてた……それを注いでくれる、今のところ唯一の存在」

——母。

「吸血鬼の価値観がわからなくなったかわいそうな吸血鬼。よく憶えてない」

——賓客。

「協力、家への協力の対価として私を求める人たち。アージェント卿には来てほしくない。痛いことばかりする——」

——愛。

「ぜんぶ同じ。でもよくわからない。お父様は教えてくれる。知りたいことなら何でも」

——知識。

「楽しい。でも、見たことのない世界の話を聞くのはもどかしい」

——父。

「無償とはいうけど、お返しがしたい。愛は、返すことで増幅する」

## 奈落で見た光

いつも地下室へ続く扉にかかっている錠が外れている。錠があるうと湿った木製の扉は蹴り破れるがこの錠はいわば進入禁止を示す看板だ。そして扉に近づくと引き止めてくる使用人も父について出払っている。我ながら子供、吸い寄せられるようにして扉の奥に足を踏み入れていた。

「……、」

中は真つ暗。足元のカンテラに火を灯す。そこは恐ろしく長い石の螺旋階段だった。自らを軽く超える深い闇におののく。夜の王が闇にびびつてどうする、先へ進め。

夜目も利かない完全な黒を切り裂き降りる。円を何周したかわからない。どこまで行けども同じ石の壁が姿を現すのみ。しかし上から下へ、若干の風が吹いていることから、これが必ずどこかへ通じていることはわかる。

父がこんな話をしていて。この大地は少なくともケーキのような板状ではないと。どんなに広い平野や湖、また海も、絶対にどこかで視線が地に落ちるのだから。そしてその落ちたところを繋いだものを地平線、水平線と呼ぶ。

水を器に注ぐと水面が水平になり、大地に注ぐと曲面になるのは、地中深く、大地の中心にある点の水なり地なりを引く張つて、水面を扇形にするからだ、彼は力説した。あまりにもスケールが大きく、また突飛な考えで、私にはよくわからない。

としたら、この深い竖穴は最後にどこへ抜けるのだろうか？父の言う「引く張る点」があるのなら、深く掘るにつれて「壁が地面にな」るはずだ。しかし、依然として足は石の階段についている。やはりよくわからない。

しかしこれはただの杞憂に過ぎなかった。少なくともこの竖穴についてはそう言える。階段は突然に終わり、明るく広い、石でできた部屋へ続けた。光源は、油の入った樽の口に布を詰め火をつけたものらしい。よくできている。

地下にそぐわぬ木製の家具たちが円形のこの部屋を囲んでいる。一番奥に天蓋とレースのついた白いベッド……三人くらい並んで寝られそうなほど大きい。そしてこの部屋のどんな異様よりもずっと異様な何か、円の中心にあった。

人形？自分くらい頭の身、身長の人形だ。後ろ手に縛り正座を前に倒した姿勢で、……背中に樽を乗せてある。新手の拷問でも研究しているのか？足繁く地下に通う父、地下から戻らない妹……まさか。いや髪が、髪の色が違う。姉妹揃って薄紫のはず。この子は金髪、あるいは脱色か。

背中に生えているのはもはや羽ですらない。何だこれは？指のように細い枝に、一對八種の……

嘘だ。こんな。

胴に括られた樽を下ろし手も解く。樽の中身は水らしく、私の体重の何倍もあるようだ。

「……………フラン？」

血反吐を吐く彼女を横向きに寝かせ顔を合わせる。髪も羽も変わってしまったがその顔つきはまさに姉妹を証明していた。

歪な羽を色づかせているのは、私がプレゼントにと選んだ、爪を模したであろう一対八種の宝石だった。

「お姉様、どうして……………その樽を戻して。お願い、お父様に叱られる」

潰れた肺から必死に紡いだ再開の言葉がそれだった。何が何だかわからない。

「何言ってるの。あのままでいたら死んでいたかもしれない」

「お姉さまこそ……………せつかくお父様が用意してくれたのに」

彼女は静かに怒っている。本当にわからない。何ができるかわからないがとにかく彼女を休ませねば。

大きなベッドの右端に改めて寝かせ辺りを見回す。もう二つ、部屋が延びていた。そのうち一つに入ると、浅い井戸、調理器具が見えた。それと樽の火を使い湯を作ろう。

水を張った鍋を樽の火で温めていく。人肌より少し温かくなったところで上げ、一部を木のジョッキに移して塩をひとつまみ加えた。

フランはあのまま微動だにしていなかった。うわ言から暴れられても困るが。そつと上体を起こして塩湯を飲ませる。

真水よりも塩水のほうが多少吸収が早いと何かで読んだが果たしてその効果を今得られているかはわからない。自分なりに最善を尽くしている。

さすがは吸血鬼、潰れた肺はすでに回復を始め、呼吸も深くなっている。べたつく血を湯と布で拭い話す。

「へへ。お姉様」

「どうしてこんなことを？もう一度話して」

「お父様。がんばれば与えてくれる。綺麗なドレスとか、……………愛を一つずつ、とか」

「がんばる……………それで、お父様はなんて？」

「無償の愛って言ってた。本来ものが現れることのない、純粹な、無形の……………なんだろう。よくわかんないや」

無償の愛。少なくとも自分が知る限りの愛は、惨たらしい拷問の先にあるものではない。吸血鬼が家族を傷つけることは

ないと父は言っていた。では、フランは……

「その、前と随分見た目が変わっているようだけど。どうしたの」

「ふふ。この宝石、お姉様を選んでくれたつて。こうして会うまでの短い間、お姉様との唯一のつながりを持っていたわね。大切なものだからつて、お父様が羽を作り変えて、つけてくれたの。髪も、より綺麗になれるようにつて」

もし彼女の言葉をそのまま受け取るとしたら、父は今まで自分が思い描いていたような、*「立派な」*吸血鬼なんかじゃない。どこか決定的に歪んだエゴイズムを、実の娘に吐き出す悪魔そのものだ。

……きつと、糾弾すれば「悪魔だからこそ悪魔らしく振る舞うのだ」とか言うんだろうな。自分は受け入れられない。無二の妹を踏みつけるなんて。

父が帰ってきたら、今までと同じ態度はとれそうにない。かといってこの地下を見たことを知ったら、自分も何をされるかわからない。……フランはその「何」を食らっているのに、いざ自分となると余計怖くなる。フランのことはまだ他人事と考えている節があるに違いない。……自分が嫌になる。

「フラン。お父様が帰ってくるまでは休むこと。それからのことはまた考えましょう」  
「えつ、でも、お父様に叱られちゃう」

「死ぬか叱られるかよ。いざとなれば私が叱られておくから。ね」

食事を作らねば。きつと給仕も来やしない。火の消えたカントラを持ち暗い階段を手探りで上る。

フランは地下でどんな生活をしてきたのだろう。幽閉と聞いてまず案じるのは教育だ。クソツタレの「おみ作法」の話でなく、常識と言える生活上の感覚や、広い世界にまつわる知識、失敗だらけの錬金術に、文学、頭痛を呼ぶだけのデオファントス著「算術」……

また父の話になるが、人が前へ進むのに必要なのは、その場を繕うための礼節でなく、それまで無駄とされてきた、腐った宝だと彼は言う。アルキメデスの投石機のように何十年も埃を被っていた発明が突如活躍することがある。しかしこの例えでいくならばその国はローマ帝国に滅ぼされている。

これだけ父に不信感を抱いておきながら、出てくる知識はほとんど、その父から授かったものなのだ。家族、親子という立場上仕方のないこととはいえ、なんだか癪に障る。

あまりに様々案じてしまう。情報が少ないせいだ。もつと聞き出さないと。衣食の問題——いや問題があるかどうかともわからない不安がある。

「暴れないの。急所外されて困るのは自分でしょ」

捕食者のくせに人を殺したことがない。勝手がわからないので、牢の囚人の首をマチェーテで斬り血を集めることにしたのだ。家畜の血抜きを思い出し首にした。

昨日の父みたいに腕を真つ赤に汚してしまった。濡れずに血を集めるのは至難のようだ。確かに給仕はいつもまくつた腕を汚している。なかなか苦勞が多いようだ。

結局、集めすぎた血を活用することはなかった。手の混んだ料理など作ったことがない。ピッチャーに入れた血とカップを持って地下へ向かった。

フランは赤い比較的質素なドレスに着替え……「替え」じゃない、着たのだ。ドレスを着て私を迎えた。なるほど美しい。悔しくも感嘆する。父のイカれた美的センスはイカれてなどいなかった。

「はいこれ。たくさん持つてきたけど飲み干さなきゃいけないわけじゃないわ。好きなだけどうぞ」

そして安心するところもあつた。ピッチャーに直接口をつけ一息に飲み干してみせたのだ。よかつた、私の妹だ。

「……よく、ここへお父様と一緒に人が下りてくるでしょ。何しに来てるの」

「ここでこころなしに彼女の顔が陰る。」

「……好き勝手やってく。人間はいいのよ、あの大きなベッドで横になって抱かれていればいいんだもの。アージエント卿が……」

卿とはいかが階級ではない。吸血鬼が表立つて国に関わることはない。これはただの敬称というか。

U r g e n tを父がまた島の発音で読む癖で、(更にカタカナ音写で)アージエントとしているが、実際は違う。自分もよく父の読みを真似していたせいでこちらで慣れてしまった。まさかフランまで同じだったとは。

「——ごめん、もういいわ。ありがとう」

かける言葉は見つからなかったし、かけてよいものかもわからなかった。とにかくここで言葉を遮つてしまった。もう後に続く言葉を聞きたくなかった。

あたり前のことのように淡々と地獄を語る彼女が信じられない。どこか夢のようでさえある。考えたことが全て雲のようにただそこを漂っていて、受け止めようにもしようがない。

「ねえ、地上に出てみたくない？こんなところよりもずっと広くて——」  
 「嫌」

何を喰らっても水のようにぬるりと抜けるようなイメージのあったフランの声が、突然、石のように固くなつて飛び出した。思わず怯む。

「広い世界を見たら……ここにいらなくなるでしょう？この部屋が、苦しみでしかなくなる気がして。いつまでここにいろのかわからなくて、いる必要がなくなったら、一緒に上で遊びましょう」

初めから父に負けていた。直感した。あえて世界を拒絶するほどに長く、ここに縛られているのだ。今何か失ったわけでもないのに、とてつもない喪失感が全身を掴んで離さない。

本当はこんなところから一秒でも早く逃げ出したかった。このしがらみから開放されて、自分だけ忘れてしまえたら。

「……お姉様？泣いてる。どうしたの」

「ごめん。なんでもない。なんでもないの」

フランの拒絶が頭から離れない。何も反論できないでいる。あのままただ外への羨望を募らせるのは酷だろう。しかしあんな狭い部屋に何年も閉じ込められているのを放っておくこともできなかった。

幸い、知的好奇心は旺盛で、運んできた本を食い入るように読み漁り、どうしようもない語彙の障壁は、自分ができるだけ横にいてやることで対処した。幾何学の才もあるようで、定義と定理を与えると、私もずっと悩んでいた、単純ゆえ気づきもしないような問題の解法を、閃きでねじ伏せてみせた。

これもしあわせというのだろうか。じめじめした地下室で二人、独自の広い世界を拓きながら考える。きっとこれも父は答えを持っていて、変な理屈だしあわせと言うんだろうな。何も好転してはいないのに。問題を先送りしているだけなのに。そしてその先送りのツケが、以外にも早く訪れた。

「主の名を呼ぶものはみな不義から離れよ……」

フランが聖書の「テモテへの手紙」を読んでいて、その隣で逐一場面の説明をしているときだった。

「カンテラがないと思つたら……君が来ていたのか」

階段を音もなく下りてきていたのは、すらと高い、全身藍一色、何でも見通すようなぎらついた目つき……

「……アーjentントさん」

「察するに全て知ったわけだ。それで、またいつもみたいアーjentントなんて呼ぶ。ふざけられる余裕があるとはね。思ったより君は薄情だな」

まあいい、そこを替わってくれ。次は私の番だ。

歩み寄るアーjentントを前に二人固まる。

——ごめん。もういいわ。ありがとう。

続きを聞いていれば、ここで抗戦する決心もついていたかもしれない。いつもあんなに優しいアーjentント卿が、私の妹に何もするはずがない。そんな希望的観測が頭に少しでもあった。

フランが私の袖を握る。たまらなく怖かった。目の前の彼は既に自分の知る雰囲気纏ってはいなかった。

隅へ追いやった鼠の頭に猫が爪を置いて囁くに、

「横で見ていたっていい。どうしてベッドがこんなにも広いのか、わかるだろう？」

そのときフランがどんな顔をしたか知りようがなかった。怖くて見られなかった。私は彼の圧力に負け、フランの横を明け渡していた。

「大丈夫、今日は阿片もある。いつの間にか終わってるだろうさ」

恐る恐る顔を上げたときにはもう、ドレスも脱がされて、それこそ人形のように、四肢もうなだれ、されるがままとなっていた。

「切る直前に飲ませたほうがよかったか？まあいいや、まだ残ってる」

しばらく身を撫でまわした後、フランを深く抱き込んで、容赦なく腰を打ちつけ始めた。呻く彼女もお構いなしに、まるでモノでも扱ような具合に。

また夢のように杲然と、眼前の狂気を見つめるだけで、これ以上感情が湧いてはこなかった。気づいたことがある。これを乖離というんだっけ——

そんなことを考えながら、ただ私は、喰い散らかされていく妹に手を伸べるでもなく、そこに、いた。

とはいえ、フランを犯していることは、人間たちと変わらない。このとき、私はまだ、彼の狂気の何たるかを知らないでいた。

「うあ、あ」

破れそうなほど大きなベッドの軋みがぴたりと止まる。肩で息をしながら、内側に丸めた胴と四肢で、貪り、劣情を爆発させたその余韻に浸っている。

「最高……最高だ……さ、土産をいただろう」

床の鋸と匙を取り出す。そのうちの鋸を、仰向けに寝かされたフランの左腕にあてがった。そこでようやく、私は夢から醒め、彼の腕を掴み引き止めた。

「だめ。お父様の友人とか、関係ない。やったら殺す」

しかし彼の反応は期待していたものではなかった。鋸をこちらの額に持つてきて、静かに口を開く。

「いいか、私は君の父との約束でここへ出入りできているんだ。君の入る余地は本来ない。早くしないと。薬が切れたら大変だ」

精一杯の威圧も軽くあしらわれるくらいには、彼との力の差は大きいもので、それから彼に手は出せなかった。

「いつ……だ……」

わずかに残る意識でフランが顔をしかめる。ただ抗うでもなく、乱雑に切り離される左肩を見つめている。錆の浮いた鋸が、白いシーツを無慈悲に汚していく。

アージエントの手が高らかに挙げられる。胴を離れ力を失ったフランの腕が辺りに鮮血を撒き散らした。

「そうだ……この腕……フラン知ってるか、きれいに血を抜いて冷やしておけば、このちんまい腕は美しさを保てるんだよ」  
次は匙。匙を右の眼球と瞼の間に食い込ませる。

「いっつっ、あああああああ!!!」

もう鎮痛は切れていた。押さえず込まれながらも足をばたつかせ暴れている。

「素晴らしい……!!完璧に取り出せた!」

まばたきを忘れた眼球を片手でつまみ愛おしそうに眺める。アージエントの興味はまるつきり、フランからその眼へ移っていた。

「自分の瞳をよく見てみたことはあるか? アルビノでもないだろう、だのにこの紅ときたら!」

勝手に心酔し勝手に語る。相手としてフランを見据えてはいない。当の彼女は混乱の中に落ち、ただ喘ぐばかりでそれどころでもない。

「早く冷やしてしまわないと!じゃ、これで失礼するよ」



服をさっさと整え出ていつてしまった。

どうしたらいいかまったくわからない。目の前には薬の抜けた瀕死の妹がいて、他にはなにもない。いずれ再生するだろうが放っておくこともできないでいる。

「……っは、お姉、様」

「!!!」  
絶え絶えの息から私を呼ぶ。隣へ行くと自分に跨るよう残った右手で促した。

腹が破裂するような激しく重い衝撃を受ける。見ると私の腹を、正面からフランの腕が貫いていた。

「……ごめん……、ありがと」

真意はわからない。わからないが、身を振ることもせず、互いの涙をすり合わせるように、血と鼻水でぐちやぐちやの顔をみつめて、私はそう応えた。

くそつたれ。これでおあいこにしてやる。

渦中の妹のそばでただ首尾見つめていた私のジレンマを、これで認め解いてくれたように、私は感じた。

## 松葉に宿る愛

上に戻ると、無駄に長く豪華なテーブルに一枚、書き置きがあつた。  
「君がいつまでも戻らないので、言いそびれたことをここに書いておく。君らの愛すべき父は明日の朝、帰る」

水を吸った重い扉が開かれる。

「やあただいま！無事帰つたぞー！」

あれだけ悩んだが結局、いつもの調子で振る舞う父に合わせるほかなかつた。傍から見ればそれでも不自然でどこかぎこちなかつたかもしれない。

今日はごちそうにしよう。その前に……少し待っていてくれ。できたら呼ぶよ。そうして地下へ消えた。

食卓と呼ばれて見たのは、文字通り肉林と呼ぶべき死屍だつた。何体もの屍をわざわざ吊るすその様はまさに林。しかしただ薄汚い囚人を乱心のままに殺して回つたに過ぎず、ごちそうには見えない。

「ああ、言いたいことはよくわかる。いつもかわいいうで顔に書いてあるからな。ごちそうとは、これだ。頑張つて用意したんだよ」

肝心のテーブルにはただ二人分、ワイングラスに注がれた真つ赤な血。席につき、向かい合つて持つ。花より団子、さらには味より満腹。少し不満だ。

「ごちそうも生臭くちや、風味もわからないかね」

「果たしてそうかしら」

グラスを傾けたその時に、私の身体は、凍りついて動かなくなつた。

「どうした、うまいぞ。味は保証する」

なお変わらぬ調子でまくし立てる。どうして飲めようか。あれだけ悩み、そして吹っ切れたと言つたが今、その針は逆に振り切れていた。

グラスを置く。匂いでわかる。散々自分が浴び交わつた……

きつと父は試したんだと思う。言葉は必要ない。グラスを置くことが、私の答えとなつた。

「……そうか。お残しとは、悪い子だ。来なさい」

重い足でついていった先は、地下だった。その道中。

「アージエント卿が見えたらう。彼は何を？」

「……右眼と左腕を。どうして」

「どうして身体を持つていくかなら、趣味だ。あの美しい身体をいつか我がものとしたいらしい。どうしてこんなことを聞くかなら、今にわかる」

階段を二人、下りる。

「後片付けが上手だな。フランの服もベッドのレースもシーツも、何もかもに、シミひとつ残っちゃいない。アージエントの後は大変だったはずだ」

異様だった。あれだけ厳しく立ち入りを禁じていたのに、今こうして二人並んでいる。

「……わざとでしょう。錠も外して」

「結果、レミリアはフランの圧死を防いでくれた。比べたら些細なことだと思いがね」

「バカ、あんたがやったんでしょように！」

怒りに任せて振った拳は片手で止められていた。

「すぐにわかる。もう少し待てないか」

フランは父の姿を認めるなり飛んで抱きついた。

「フラン、お疲れ様。改めてよく頑張った。右眼と左腕だったね」

瞬く間の出来事だった。ぶぢ、と聞いて見ると、再生した眼と腕を、父がまたも奪っていた。

慌てて止めに入るも頭を片手で掴み止められた。フランも嫌がりもせず父の胸に顔をうずめている。

——すぐにわかる。

この異様な構図の意味がすぐにわかる気はしなかった。

父は慈しみさえ覚える眼差しで、じっとフランを見つめている。この凶行を通じて、その慈しみはフランが一身に享受する。

「……フラン。少し、レミリアと話をしてくるよ。また会おう」

「お父様。必ず戻ってきて。お話したいことがあるの」

もちろん。言つて二人、上へ戻る。

「……お父さん。すぐにはわからなかつたけど」

「そう焦るな。上でわかる」

「レミリア、君は今、私を父とは呼ぶが、実のところ重犯罪者のように考えているだろう。結構だ、今のところは……：そう思うような育て方を、したからね。吸血鬼の道にそぐわない、そう考えるのも、仕方ない。我々は同胞を傷つけはしない。そしてフランドールは、同胞以上に、家族である……それは君もよくわかつているだろう。私は——傷を以て、傷を癒やしているんだよ。

レミリア、私は君を、愛している。そして松ぼっくりを手渡したとしよう。すると松ぼっくりは、……我々の、愛の象徴となる。しかしどうだ、見ず知らずの他人がとつかえひつかえに松ぼっくりを手渡してきたとして、そこに愛を感じられるか？ 否。そしてその後、私がそれらと同じだけの松ぼっくりを持つてきて、娘に言うんだ。愛してる。そしてそれが、松ぼっくりが、フランの場合鋭い松の葉だった、というだけだ。

ある人間が歪んだ色欲を以てフランドールを犯し、ある吸血鬼が独占欲を以て右眼と左腕を切り離したならば……：私は慈愛を以て彼女と交わり、また右眼と左腕を切り離し、痛む間彼女を抱き締める——それだけだ。

しかし君は見た。他人の行いとは関係なく、私が樽であの子を踏みにじっているのをね。簡単な話さ。松の葉を愛の象徴と認識させるための、言葉は悪いが、謂わば躰だよ。

考えうる疑問には答えたつもりだ。何か、あるかな」

この理論に疑問はない。ないが、獣を飼いならすような、そんな違和感がある。

「広い世界も知らせないで、あのまま腐らせるっていうの」

「だからこそだ。広い世界……：案外狭いものだが、地下よりは広いこの世界を知れば、今までの生活に肩を落とすことになる。君が余計なことをしなければ、あの子はあのまましあわせを享受できる。そうだろう」

フラン自身、同じことを言っていた。彼女自身、父の意図に勘づいていた。二人の関係は、私の入る余地がないほどに完成されていて、かつ繊細なものだった。

「どうして私には……：松ぼっくりを」

「吸血鬼は人間以上に欲深さを表出しやすい生き物だ。同胞を傷つけるなどは言うが、実際守られていることは少ない。アー

ジエントがいい例だ……そして私に娘は二人いる。二人いれば何かについて争いが起きるもので。同じ育て方はできないんだよ。どちらかに充足を教える必要があった。それが彼女だ」

よどみない。言ったことに即答する。明らかな悪を、私は糾弾できなかった。

「わかるか、私は君に欲を持つことを許している。私も生存への欲を優先して抗うだろうが、私は君が自分の勝手に私を止めることを許しているんだ」

立てた理屈で動く大人と、感情に任せて暴れる子供。暗にそう揶揄している。

「もし全て、忘れてしまいたければ、私に言いなさい。いつでも消してあげよう」

反論できなくたっていい。殺す理由を探しているに過ぎず、また既に感情という理由がある。子供らしさに乗じてしまえばいいのかもしれない。あのまま放っておいたら大変なことになるのは明白だ。

……方法を思いつかない。喧嘩じゃ勝てないのは目に見えている。何か仕込もうにも、あの知覚と頭脳に敵う自信はない。……先にフランの洗脳を解いてしまえば、あいつも諦めるほかなくなるのではないか？

地下でも体内時計が狂うことはない。一日の決まった時間に日課が勝手に進んでいく。宵の口に客が来て、遅かれ早かれ前には帰っていき、入れ替わりで来る父に全力で甘えた後、また来客まで眠る。何度続けたか知れない。これからも知れない。

無限のうち今までの三分の一あたりで、父は時計をこの部屋に飾っていった。ひと抱えくらいの、小さな、低い円柱型の時計だった。それまで建物に埋め込むほど大きく重かった機械じかけのものを、とある錠前職人がここまで小型化したのだそうだ。この部屋のどんなものよりも細かい作りの部品がいくつも精緻に噛み合っている様子から、なんとなく壊してはいけないような圧を感じたため、ベッドから一番遠い筆筒の上にそと置いておいた。逆に、腹が立ったとき、近くにあれがあると、なんだか冷静になれる気もしたが、もし壊してしまつたら、と考えると恐ろしい。

甘えるときも怒られるときも、父が私にすることに変わりはない。が私を叱るとき、父の顔から一切の表情が消え、彼は機械のように、懲罰に徹する。これが私をたまらなく不安にさせるのだ。

さて、今時計は6を指している。階段から高らかに響く靴の音は今日の賓客だろう。

「やあ、この日が待ち遠しかったよ」

クワも持てるかわからないくらいに細い身に、みすばらしい無精髭。街から父へ捧げる人間を選ぶ者の一人だという。この男は、なんというか、ここへ来る人間の中でとびきり愛がない。話をしても、私に話しているようで、どこも見ていないような感じがする。話す意味がないので基本的に返事はしない。

ベッドの左端（真上から枕側を上として見て）に移動する。身内以外の匂いがついたところでは眠れないので、右端を自分のテリトリー、左端を接待用と決めている。

ここを娼館のセットと勘違いしているのか、男はいつも、なんの躊躇もなくベッドに転がり込んでくる。客でなければ挽き肉にして水路に捨てているところだ。いやこいつの血も浴びたくない。

「うん……」

もはやただの抱き枕だ。寝つ転がる私を後ろからぎゅつと抱き深呼吸している。こいつの行動はだいたい決まっていて、思い出すたび吐き気がする。

「ねえ、週一でゴボウみたいなやつに好き勝手されてる私の気持ち、一度でも考えたことある？」

うなじのあたりで思いつきり吸い込んだ息で彼が答える。

「あるとも。だからこそ興奮するつてもんだ」

「……はあ。今ここで殺してこねて、肉団子にしてお父様に食べてもらおうことだつてできるのよ」

「でも今まで君はそうしなかった。そういうことだろう」

男の指示で彼の頭を内腿で挟むと、今度は私の股ぐらにむしやぶりつき始めた。

「もう……あんたが帰った後、何時間体洗うと思ってるの」

洗うより半身を切つて生やし直したほうが労力はかからないかもしれない。

ちようどこの脚で絞め殺してやろうかと何度思ったことか。本望だろうに、そうしてやろうかしら。

毎度毎度、よくもまあ自分の涎でえらいことになっているところにこの貧相なモノを入れられたものだ。次来るときは正面に姿見でもおいておこうか。

「今日は、これを」

油断していた。いつ用意したかもわからない。左内頬に押しつけられた右親指が変に苦かった。察し慌てて手をどけようとしたがもう遅い。

「本当は、君に使う薬は君のお父さんが管理してる。けどつまらないだろう?」

「もう……最っ低……!」

抗えない。抗いようがない。頭の中のレバーを乱暴に切り替えられていく感じ、とても謂おうか。

五感も思考も、津波となつて押し寄せる極めて不快な快感に尽く呑み込まれ、意識は明瞭、しかし意識はなくなった。

男の胸板が見える。その胸板、荒い息、むせ返るような体臭、パーソナルスペースの圧迫感、それぞれが反響し、うなり、脳を蹂躪する。

多幸感。父はそう呼んだ。しかし同時に否定もした。これで感じるのは幸せとは違うようだ。

そんなことは今どうだっていい。多幸感だか不幸感だか、とにかくそれで全身がいつぱいで、なんとなくやり場のない焦りも見える。

大っ嫌いな奴にむりやり犯されて、人形みたいにごっこ遊びに並べられて、気分は最悪なのに最高で、未知の昂りを止められなくて……

知ってる。でも名前は知らない。ひとつまみもない練り物でその時は誰だつて迎ええられる。

どうだつていい。考えるのはやめた。

そうしてまわつてくるツケはなにもかも、想像を軽く超えるようで。

「あ、い、いた、い。うそ、」

ものによつては全身の激痛を伴う。それを上回る快楽に少しの間浸つたところで、最後まで痛みをこまかし切ることはない。

砂が血管を通るよう、とでも。わけもわからず暴れてベッドから落ちて、床でまたのたうち回る。触れた地面が、身体を押さえた両手が、身体を刺す。そうしてまた転げまわる。焼けた礎石に投げ出された芋虫みたくだつたと思う。

余裕をみて辺りを見やる。自分のじやない血溜まりが見えた。芋虫がどうでもよくなつて暴れているところへ父がやってきて、また別の薬を飲ませると、芋虫は死んだように固まつた。

「……まずい。レミリア行くぞ」

父が慌てている。私もつられて、二人、いや二人分、無数のコウモリがもつれ合つて地下への階段を下る。

この世のものとは思えない、辺獄の亡者のような叫喚が螺旋を舐め上げ、反響する。

暖色の、かつて生きていた顔料が、部屋を執拗に穢していた。その奥で、叫喚の主が何事か口にするが、それが何なのかはわからない。バラバラの単語を、文を真似して繋げているだけともとれるような、曖昧な旋律だ。

人の区別もついていないフランを強引に父が抱く。抱くがこれは抱擁というより拘束に近い。

「すまない、フラン、こんな……レミリア、薄い塩水をたくさん作ってくれ。得意だろう。落ち着いたら飲ませるんだ。吐いてもいい」

父が小瓶に入った液体をフランの口に突っ込むと、半端に咳き込んだのち、ぐったりしおれてしまった。

「ヒヨスだよ。あれにはいくつかの、それぞれ効果の違う成分が混じっていてね」

それから何時間待ただるうか、いや何日、わからない。とにかく長い間、彼女のうわ言を聞かされていた。床にぶち撒けられた、人だった汚物も、その匂いもきれいに消せるほど長い間。

あるいは、彼女の穴という穴から垂れ流される血を布巾で拭い、バケツ半分貯まるまで絞った頃。ようやく彼女は目を覚ました。

「毒を抜くなら、代謝を待つより血を抜いてしまったほうがいいんじゃないの」

「こいつならやりそうだ。三秒後には足をもいでいたりして。」

しかしそうはならなかった。

「それが……アーゼントとの件で既に貧血だね。これ以上は吸血鬼として危険なんだよ。ほら、今のうちに水を」

父が片腕でフランの体を起こす。フランは小さく呻き私を見る。いや見ているのかはわからない。人の区別がつかなければ、私を見てはいない。

「飲める？ 頑張って」

力のない口に恐る恐る水を流す。カップ半分ほど飲んだところで、倍の量の血として吐き戻してきた。服の血が血で上塗りされていく。

「これでいい。どのみち毒は吐けている。量を減らしてやってみよう」

「……毒。毒ってなんだ？」

「あの、毒って」

「毒も薬も紙一重、あのバカが何を飲ませたか知らないが……見るに手製だな……同定できない」



あの男は私が殺したらしい。彼が父の管理の外でしたことが原因だったから、父は私を責めなかった。殺してよかった。気味の悪い、形のない松の葉を投げるような人は殺されて然るべし。

「本当にすまないことをした。彼のことは信頼していたんだ。まさか自前の薬を持ち込むなんて」

私の寝る横で父はうわ言のように延々語っている。その言葉は耳から抜けるばかりで、ほとんど理解していない。

あれから数日が経っていた。いや何日眠っていたかわからない。はじめに目を覚まして数日、か。血管の砂はナリを潜めていて、立ち上がると足に集まって肉を刺す他に悪さはしない。めちやくちやだった脳ミソも少しづつまとまりを取り戻しつつある。

前にレミリアも来て、うわ言をさんざん撒き散らした後、勝手に私を抱きしめて、寝たきりの私の世話をし、勝手に帰っていった。

食事どころかまだ水もまともに飲めない。飲んだところで、胃の出血と一緒に全て吐いてしまう。でも水だけは摂らないと死ぬと聞いたので、飲むでは吐いてを繰り返し、むりやり腸に送って、疲れて眠る。こうしてなんとか数日耐えてきた。

父はほとんどつきつきりで看病してくれている。寝るときも起きているときも、いつも隣にいて、正直邪魔だったけど、心細くはなかった。意識があるのかないのか、いつあったのかもよくわからなかった初日あたりで、父がいなければ気を遣えていたかもしれない。……もともとしてのはナシ。

## 父に捧ぐ、五世紀の出発点

「フラン、君は自分がどうしてこの暗い地下で我々の相手をさせられているか、よく考えたことはあるか」  
忌々しい薬が抜けて五日。久々に迎えた客はよりによつてアージエント卿で、なぜかいつものように荒い扱いはしてこない。……今のところは。

「ブランドール。父親からその由来を聞いたぞ。人々の薄汚い人形劇に付き合っていればいいんだよ。それが唯一の、君の存在意義だ。父親は君を娘だなんて思っちゃいない。厄介払いされたんだよ、君は」

「っ、違う！お父様はそんなこと言つてない！お父様は私を愛してくれる！あんたと違つて乱暴しないもの！私だつて、お父様のこと、……」

いつになく優しく丁寧に、泣く秘所を愛撫される。

「わかつてないなあ、いつか捨てるものだつて、普通わざわざぎつく当たったりはしないだろうに！この際言うが、君は服を何着持つてる？そのみすばらしい瘦せたドレスを。私は四着しか知らないがね。四着のドレスと時計をこつても大事にする。令嬢」を、私は君の他に知らないぞ。あの男が君に割ける労力など、知れているんだよ」

「それだけじゃないもん！この羽の宝石だつて、お父様と、お姉さまが——」

「そう頑張つて反発しなくたつていいだろう。諦める。それは君を飾るものじゃない、外側、肉体を飾るものだ。君の中身なんかどうでもいいだろう」

彼が苛立った。細い羽を手綱のように引つ張られる。言っていることがだんだんよくわからなくなつてくるが彼のまくし立てで不安だけが募っていく。

さらに重ねる。巨軀が胸を幾度となく押し潰す。恋愛でも性愛でもなく、ただの嗜虐心から。

「珍しく、恐怖というものは一元的だ。すべて未知への不安に起因する。相手が何をするかわからない、明日の自分の生死がわからない……死は、死後を知らないから、誰も怖れ……畏れるんだよ」

しかし今のうちに、真に怖れているその瞬間は、自分が何を怖れているかなど、自覚する余裕もない。  
「本質はわからなくなつていい。君は今、何を怖れている？」

それはもちろん、

「わかつてるくせに」

「そうだな、しかし君は、私が何か問いかけたとして、いつもろくに答えられないが、今は違う。もう私自身を怖れてはいまい。君はかつて、私の何を怖れていただろうか？」

答えられない。

「今のは怖れじゃないな。本当にわかっていないときの顔だ。……君はな、私が君に何をするかわからないから怖れを感じたんだ。今のところ君の体に未知を持つ痛みを与えていないからな。……しかし今だって、私が次の瞬間に何をするか、わかったもんじゃないだろう」

聞いて、恐怖の証左を表すにはあまりに時間が足りなかった。

「っ!!」

言いつつ両手で私の首を、敵いそうにない力で締め上げていた。その手を掴んでも叩いても、びくともしない。

「危機感が恐怖を上回ったな。うん、『かわい』」

さらに危機感は諦念に置き換えられた。諦めると案外冷静になれる（因果は逆かもしれない）もので、ひとつ気づきを得た。息が切れるよりも先に意識が切れ始めるということ。

「そうすぐに落とすとも思ったか？」

安堵し絶望もした。それを見透かしているのか、予想していたのか、アージエントがこう続ける。

「諦めたあと、自分を落ち着けるための口実を探したな。それで、気を失えば苦しみからは逃れられるとそう考えることくらいわかる。君のある面については、父親より詳しいと自負しているんだ」

こう考える彼の心理は、私にはよくわからなかった。自慢気に語るが、彼が誰かにマウントを取る必要などまったくないはず。かれもまた夜の王、それだけで、このあたりで最強クラスの存在といえる。……いや、父に対し何か、敵意、あるいは劣等感を抱いているのかもしれない。

「っ、なに、お父様と、張り合っちゃって。足元にもつ、及ばないのに」

「なるほど君はよくわかっているらしい。何を彼と比べているか」

それと、挑発するだけの余裕があるようだ。そう加えて、私の腹を正面から二度殴りつけた。

「っが、ハ、あ、……」

「人が人形を取り合おうとするのは当然だ。人形は軽口を叩かない。そうだろ？」

「……やけに静かだ」

何故か新約聖書を読みふけていた父がぼつり、呟いた。

父は聖書に限らず、教典をひどく嫌う。教祖が何を言おうとも、必ず後世の者どもが勧善懲悪のストーリーに書き換えようとするからだそう。反逆を悪とする信者は指導者を崇め奉る。それだけの理由で、重んじるべき先人の教えを無下にするのだと。

「聞こえるの？ いつも」

「ああ、何をかはわからないが、叫ぶ声がね」

あのアーゼントが地下で遊んでいるときはいつも、フランの悲鳴が微かに聞こえてくるらしい。よく耳を澄ませてみても、これまでに不自然な音を聞き分けられたことはないが、彼が言うのならそうなのだろう。

夜間聞く音に彼女の叫喚が織り混ざっていると知ってできることといえば、賓客どもを睨みつけることくらいだった。彼らに飛びかかったとして、誰に何をされるかわかったものではない。疑心暗鬼で誰にも頼れないでいた。

父は、嘘はつかない。騙そうともしていない。考え、価値観は決して容認できないが、その点では信用しているのかもしれない。今も気になることがあればまず父に聞いてしまう。

「……使用人に任せてはいけなしかもれない。そろそろだろうから、行つて片付けまでしてきてくれないか。今は……私は出ないほうがいい」

珍しく父が思いつめている。ただ心配しているだけともとれる顔。父が心配するほどとは、ただことじゃない。

階段を降りていく。確かにあの悪夢のような叫びは一向に聞こえてこない。彼は毎度派手にやるイメージがある。

「やあ、また来てくれたのか。生憎ちようと終わってしまったところだがね」

またそそくさと戻っていった。睨む暇もない。

フランはベッドの右端にいた。頭を腕で覆い横にうずくまっていて、全身にいくつもの痣が見られる。

殴られたとか、犯されたとか、それだけじゃないように見える。もう声を押殺して頭を隠す必要もない。

肩を叩くと応じて腕をきゅつと締めた。

「ねえ」

荒い息も抑えられなくなっている妹が、姉に怯える？ いや何かおかしい。あいつに何をされた？

「震えてるだけじゃ何もわからないのよ。何だっていいから、怒らないから、何か、話してくれる？」

こういうときこれ以上急かしてはいけない。相手から情報を得られるまでは、こちらからのアプローチなく得られる情報をかき集めて、状況を推察する……偏見を膨らませていくのだ。

こんなこと今まで——会ってそれほど経ってはいないが——になかった。実の姉を、家族を、拒絶している。人の区別はついているはずだから、それで合っていると思う。

表情。切羽詰まっではない。やつぱりこちらを意識している。覗き込むと目を逸らす。

拒絶の根源は大別して二つ。相手を信頼していないか、相手に後ろめたい何かがあるか。後者は何も思い当たるものはない。では……

待て。私はフランを信頼できているか？ 信頼は互いにあつてこそ成り立つ。自分が彼女を信じられていないのに、彼女に私を信じろ？

何が私に彼女を疑わせているんだろう。今この瞬間で言えば、「何を彼女がしでかすかわからない」から、疑い、身構えているかもしれない。どうしてそう疑う？ 前例を見たことは？

……ない。痲癩持ちだと父は言うが、それがどうした？ 痲癩を持つているから地下へ娘を閉じ込める？ ああだこうだと親や周りにわがままを押し付けられない子供、即ち私が異常ですらある。

父はこれにどう向き合っている？ 結果はどうあれ、わがままと我慢との折り合いをつけるよう促しているか？

これが促しでなく矯正なら、純粋に反発することもあれば、別の何かが歪むことで問題が表出することもある。そのはず。恐れることはない。いずれにせよ意味、原因のない行動は、彼女からは出てこないはず。

……信頼とは、取るべき行動、心理を把握したと思ひこむことなのか。

「フラン。私、松の葉は渡せないけど……」本物の「松ぼっくり」を渡すことならできるのよ。松ぼっくりじゃあなたを飾ることはできない。でもあなたを宝石で飾ったとき、宝石じゃない何か……嫌なものを、あなたに押し付けてしまった気がして、だから——」

「……ほんとに？」

「渡すべきはいつだって感情でしょう。それが何であれ、ね」

自分は自分を信じていなかった。思つた通りの事柄を、淀みなくフランに伝えられるか心配でならなかった。

「フラン。私、松の葉は渡せないけど……本物の松ぼつくりを渡すことならできるのよ。松ぼつくりじゃあなたを飾ることはできない。でもあなたを宝石で飾ったとき、宝石じゃない何か……嫌なものを、あなたに押し付けてしまった気がして、だから——」

……羽の宝石。私をきらびやかに、華やかに飾り、また同時に吸血鬼のアイデンティティを奪った、この宝石たち。送った本人はそれを思い知っていた、ということか。……アージエントの言っていた、「宝石は内面を飾らない」、これをなんとなく、レミリアは感づいているのだろう。プレゼントは——内面を明るく照らすためのものだ。

「……ほんとに?」

「渡すべきはいつだって感情でしょう。それが何であれ、ね」

痛む関節に鞭打って起き上がる。レミリアの眼差しに猜疑心の入る余地などどこにもなく、どこまでも真つ直ぐだった。

「ほんと、口下手ね。相手には何も考えさせないものよ」

「考えない会話は何も生まないでしょう。考えなければ、フランが顔を上げてはくれなかったと思うけど」

雪は解けた。本来あるべき家族像が、少し見えた気がした。

「……ごめんなさい。アージエントに、ひどいこと言われて。お姉さまは、そう、じゃないものね」

「あいつは何て?」

「私は厄介払いされてここにいらって」

レミリアの表情が固まった。素直に否定しなかった。

「……わからない。どうしてお父様がここに閉じ込めるのか……いろいろ話してくれたはずなのに……それを直接、教えてはくれなかった」

「否定しないのね」

「そうじゃない。唯一の姉妹でしょう。ただ、わからないのよ。お父様が」

噂をすれば影が差す。父が降りてきた。

「彼の相手をして五体満足とは、ますます怪しいな。今日は何をされた?……レミリア、ありがとう。私が引き継ぐよ」

レミリアが下がり父と交代する。

「どうするつもり。フランの腕も眼も、無傷だったのよ」

「無傷なものか。嘘はいかんね。見たくなければ戻っていなさい」

「こんなのおかしい。普通殴られて喜ぶ娘なんかいないでしょう」

父がレミリアの方へ向き直り言う。

「三步歩いて忘れるほど君は馬鹿じゃないだろう。言つたはずだ、松の葉だよ」

レミリアの顔が崩れる。そして子供らしく泣きじゃくる前に、階段を駆け上がった。いった。

「……どうしてあんなに取り乱すの」

「愛を表す言葉が違うんだよ。さて、アージエントは君を殴りつけるだけじゃ済まされなかつたらう」

客の行いを聴いてその日のメニューを決める。

かくかくしかじか。

「なるほど、彼は君に、君の人格に、価値を見出せなかつたんだな。当然だ。彼は人格レベルでの対話を求めてここへ来ているわけじゃない」

あれだけ私の心をかき乱したあいつの言葉を、造作なく否定した。真つ向から否定した。

「お父様は、どうなの」

私の瘦せた頬に大きな手を当てて、話す。

「全てだ。フランドール、君の全てに、無二の価値がある。レミリアや、母さんにだって。もちろん私にも……きつとある。それに、彼が貶さなかつた、君の外見的な部分、それも人格と等しく君自身だ、自信を持ちなさい」

腹をべろんとめくりシャツの上からへその少し上を拳で押さえられる。芯の脈を直に感じる。鈍い痛みが都度呼応する。

「痛みだけじゃない。深呼吸——言ってみなさい」

「ん、なんか、変な感じ……あの、多幸、みたいな」

あいつに殴られたときくらいひどく痛むはずなのに。それをかき消すようにして、*“幸せ”*の霧が頭いっぱい立ち込める。

「や、めて、ください。お願いします」

あのゴボウが持ってきた薬を使つたときと状態が酷似している。

この先は見当がつく。怖れ？いや虞れだろう。未知でない。顛末が見える。消え入りそうな声で懇願した。

「信じなさい。大丈夫、深呼吸——」

首を左手で締められる。しかし喉を塞がれてはいなかった。側面を、血管を、その手が締めていた。気を失うその瞬間まで「幸せ」に包まれていたこの時が、最近で一番しあわせだったと思う。

吸血鬼にはどんな毒が効くだろう？人間……使用人にも秘密で全て進めなければならず、また弱点らしい弱点をつくものは一人では扱えない。銀粉は触れられもしないし、香辛料は仕込めば匂いでわかる。植物由来の毒は即効性に欠ける。精製、単離する術も持っていない。蛇の毒は試しに血に混ぜてみたら、血そのものが巻き貝の卵塊のように固まってしまった。

……血に仕込みさえしなければ使えるだろう。

傷を短時間で治すのだから、毒にもかなりの耐性があるかもしれない。

たった一滴、舌につけてみたところ、

「ん、特に何も……、！」

舌の感覚がない。それどころかその範囲は想像を絶する勢いで拡大している。上から下へ順に力も入らなくなっていく。声も出ない。薬品棚の下に一人ひざまずき予感した死を実感させられるまま生殺し、一秒また一秒、

「——は、」

湿った石柱と蜘蛛の網が見える。死にはしなかったらしい。

「うっかり薬品倉庫で毒を飲むとは、おつちよこちよいだねえ」

父が目を細める。

「せっかくこの身体があるのだから、使ってみなきゃ。見つけてくれてありがとう」

「このもので遊んでいてレミリアがいらついでいない時はないからな、静かだと気になるものさ……ところで、誰のために？」

「こいつはわかっている。わかっただ上で、あえてこちらの答えに期待している。

「自分のため。どうにもならないことってあるでしょう」

「そうだな、誰のためといえは君だけのためのなる」



「いちいちいやらしい。」

「じゃ、完成を楽しみにしているよ」

「見ない間に痩せたわね。きちんと食べてる？」

キラ。大柄、というか巨大な女性……おばさん。何百年生きてきて、それなりに体も年を食っているはずではあるが、肌はぱつぱつむちむち、ときに村一つ絶やすほど血気盛んで若々しい。

ぱつぱつむちむちとはいうが決して肥満体型というわけではない。馬鹿力の源だ。人を襲えば骨も残らない……らしい。とにかく巨大で残忍で、怪力持ち。拳一発で石柱にヒビを入れたとか……

「どうしたの、固まっちゃって」

アージエントほど頻繁ではないにしろここへ来て、彼同様好き勝手に帰っていく。

「いっ、た……！」

右脇腹に一本、深く切り傷をつける。

「やっぱり。ほとんど脂肪ないじゃない」

「いだっ、だめ、あ、」

そこに手首をねじ込み腹をかき回される。いくら暴れようと怪力の前には歯が立たない。

「あなたを一番感じられる。いい方法だと思わない？」

膀胱を握り潰すと刺さるような痛みと同時に血尿が噴き出た。

「あんまり啼かない……よほど疲れてるのね」

苦痛は飽和し消化しきれしていない。冷静では諦めているのに、反射か、振ってしまおう。そうして余計に自身を傷つけることもわかつている。

「!!」

心臓を鷲掴みされていた。跳ねるそれを力で捻じ伏せるように。脂汗が滴る。

「っは、へあ、あつ、……」

「なあに、はつきり言ってるん」

呼吸もままならない。横隔膜は破られ、肺はその機能をほとんど失っていた。

「最も確実な自己防衛は、自らが力を持つこと。髄まで血を抜かれたくなければ、あなたがお父様よりも強くなればいい。単純なことでしょう」

経験のない類の痛みが胸部を襲う。キラの手が心臓を締め上げている。先の未知への焦りとは裏腹に、自分にできるのは、何についてもわからずただ祈ることだけだった。

死すら見える激痛は際限なく増大するように思えたがそうはならなかった。

……ならなかったとはいえ、それで良かったとはいえない。

!!!

心臓から離れたその手で、無造作に腹をまさぐった後、そこから手を引き抜いた。

「その愛らしい身体、もっと見せてごらん」

脇腹の傷を両手で横に引き裂いていく。胴から乖離する皮はどうにもできない。早くも再生しかけている肺機能の全力を以って叫ぶ。

「やつ、めろ、……ってー！言ってるんでしょー！」

胴の筋肉はもはや使い物にならない。そんな中から繰り出した、それはもう貧弱な一発だったと思う。なのにその拳を食らったキラの左顎は、槍を刺して削ったようになっていた。

そしてそれを物ともせず、どうやっているのか、キラは笑う。

「あつはは、そう！それよ！どこで覚えたのかしら、その魔法」

魔法？ 錬金と同じく失敗だらけの、魔法？

「でもね、魔法魔術は等価交換なのよ」

ばさ、と。右の袖から何か落ちた。キラを殴った右腕だった。肩から抜け落ちたそれは組織が互いの結合を手放し、腐ったように形を失っていく。

等価交換。代償を払ったまだった。

「キラ。どういふつもりだ」

でかい吸血鬼。控えめのラフにスラッシュユだらけのクリムゾンのドレスを身に着けている。

「ずっと地下であんなことさせるつもり？ 死んだほうがマシよ」

……死んだ？ 父の顔色をうかがう。明らかにいつもと違う。何が起きた？

居ても立っても居られず階段を飛んで降りる。そして見たのは、

「……は？」

端切れのようになったドレスに、……フラン？ いや、そんな。

全身に噛み傷、ない腕、扉みたいに開かれた腹部……

顔に生気がない。無節操に撒き散らされた体液と対照的にまったくの白となった身体。まさか、

「や、なんで、……んっ、げ」

食べたもの全て吐き出した。妹のそれらには遠く及ばない。横に膝をつきうづくまる。

もはや自分でできることはない。体が動かなかった。すべきことも見つからない。何もかも遅すぎた。あの女が私から全て奪っていった。

「何をポーツしてる、詰め直さないと」

後から来た父が悲しみも見せずフランの方へ歩む。

「本当に手遅れになるぞ。早くしなさい」

飛び出た臓器をせつせと戻している。

「まだ間に合う。泣いてる場合かね、手伝ってくれ」

よろよろとフランに向き直る。腸は難しいが他はわかる。だいたいいい、そう父が付け加えた。

触れた腎臓はすでに冷めきっていた。大動脈とも繋がっていない。妹の臓器を直に挿んでいる。

人体にはこれだけの血液が巡っているものなのか。空になった腹には湯船のように血が溜まっている。

「ありがとう。頑張れ、もう少しの辛抱だ」

死体を冒瀡している気すらする。何が「手遅れにな」るんだ……？

「よし。離れて」

その場に落ちていた、きつとこの凶行に使われたであろう刃渡り十センチほどのナイフを深々と、フランの腹側から背骨に

突き刺した。

——ここまでして、フランは目も開けない。やっぱり……

父が腹の扉を閉める。中のナイフは握ったまま。そして、何やら唱え始めた。ルーマニア語と何となく発音は似ているが何を言っているのかはわからない。

ずぼ、とナイフを引きずり出す。フランの身体が大きく跳ねる。時間が逆行するように傷は継ぎ目なく癒え、シーツの染みとなっていた何かが形を取り戻し右腕となった。

「……、フラン」

「死の直後なら、フランはもとに戻せるんだ。私がそうしておいた。自分自身で試してみるんじゃないぞ、君にはしていない」  
ひどい保険だ。なんてことをフランに科したのか……

「ともかく、こうして再会できた。聞こえてるかな？」  
フランがにと微笑み返す。

——役者は揃った。

肉林と呼ぶにふさわしい。意味もなく死体を吊り飾った食堂へ父を呼び席に着かせた。

「こども血生臭くちや、風味もわからないかしら」

彼はレミリアが薬品棚で蛇の神経毒をいじっていたのを直に見ていたので、まさか毒を使って自分を殺すまいと高をくくっていた。しかし来てみれば、鼻もまともに利かなくなるほどの死体に、血の入ったワイングラス。

「果たして、そうかな」

レミリアが私を呼び出した。殺されるとしたら今だ。彼がそう信じて疑わず、口元まで持っていき嗅いだそれは、なんの混じりけもない、フランの血だった。

わざわざここまで準備をして、何故ただの血を振る舞う？彼にはわからない。

「味はあなたが保証してください」

グラスを置く。

「成長したな。意図が読めないんだ」

今まですべて自分の管理下であり、一挙手一投足、考えることまで手に取るようにわかると、思い込んでいた。しかし彼女は、レミリアは、親の心から離れ、自らの道を創り歩み始めている。

「……そう。お残しとは、悪い子ね。長女式の愛を以って松葉を迎えるわ。レーヴァテイン」

気がつけば胸を真一文字に斬り裂かれ、椅子の下に転がっていた。知れず魔法を身に着けた愛娘フランドールによる、レラスの驚狩りだった。

「なるほど、この不意打ちは気づかんな。二人ともよく育った」

「異国の槍。お父様には似合わないわ」

レミリアがその小さな脚で、父の頭を踏みつける。

「これで満足か、スカーレット家次期当主。松葉の親子愛を無事引き裂いたんだ、この上ないハッピーエンドだろう」

「……何か。言い残すことは」

「この地もじき敵に落ちる。東へ進み海を渡れ。二人とも、*“幸せ”*にな」

数日経つてのち。

「ほらフラン、行くよ」

「うん、ちよっと待って」

食堂でそのまま灰となった父を見て。

最後の口づけを贈り、小瓶に灰をすくい取る。

目指すは未来の黄金の国。  
道中で出会う新たな家族は、二人にとってどんな救いとなったろうか。

「フランちゃんはワラキアでも虐待されてるんです」

小説ID : 252695

雷之電

Generated by ハーメルン